植樹式
1999

時の蘇生・柿の木プロジェクト

目次

2020 年 更新

3 月 6 日		キングスウッド ファミリー アドベンチャー (旧 アースセンター) イギリス・ドンカスター	1
3 月 10 日		ジャンリュルサ美術館 フランス・アンジェ	2
3 月 13 日		オソリオ市民の家 スペイン・グランカナリア	3
3 月 13 日		赤羽自然観察公園 日本・東京都・北区	4
3 月 21 日		システュード自然公園 フランス・ボルドー	5
3 月 24 日		エピネ国立競技場 フランス・エピネ	6

キングスウッド ファミリー アドベンチャー（旧 アースセンター）

イギリス
ドンカスター
1999 年 3 月 6 日

イギリスのアートセンターというところから問い合わせが入ったのは、97 年のことです。宮島達男がロンドンでの個展を行った際、苗木の募集を呼びかけ、それに応募してくれたのです。問い合わせが入った時、まだアース・センターはロンドン郊外のドンカターに計画途中で、自然観察公園としての機能を持ったテーマパーク内に「こどもの森」を作る予定でした。そして、その申し込みをしてきたアース・センター設立委員のスザンナ・ロビンソンさんは、柿の木プロジェクトの内容をとてもよく理解して、早くから苗木とこども達との関わりを作る企画を提案してくれました。たとえば苗木の植わった後には、この木を見る園内ツアーをつくり、この木の由来などをこども達と話し会うといった計画も早くから実行委員会に寄せられました。完成までの 2 年間の間、機会を見てはロンドンで実行委員と打ち合わせを行い、たくさんの意見がファックスでやりとりされました。

そして 1999 年 3 月 6 日、苗木はとうとう同センターに植樹されました。地面がまだ雪におおわれ小雨の降る中、詩人のテリー・グリフォードさんが集まってくれた市民やこども達と柿の木に関する詩をラップのリズムで詩を朗読するパフォーマンスを行いました。「カキ・ツリー（柿の木）」「カキ･ツリー（柿の木）」「グローングアップ・カキ・ツリー（大きく育て、柿の木）」と、テリーさんが体を揺らしながらリードすると、まわりのこども達もどんどん声を大きくしながら、テリーさんの詩を一緒になってラップで朗読しました。テリーさんの詩は柿の木をみんなで育てることの大切さを説いた内容でしたが、ラップというスタイルをとったことのユニークさもあり、こども達も熱心に参加していました。植樹当日は大変に寒い一日でしたが、体を動かして詩をラップで朗読したこども達と市民は、顔を上気させ力強くこの植樹を盛り上げてくれたのでした。

アースセンターは、2010 年に閉鎖されました。

ジャンリュルサ美術館

フランス
アンジェ
1999 年 3 月 10 日

1998 年、長崎広島原水爆研究所を主宰するパリ在住のミホ・シボさんが、柿の木プロジェクトに共鳴し「フランス各地に『被爆柿の木二世』を植えたい」と申込まれました。熱心なミホさんの呼びかけにより、フランス国内でアンジェとサン・ドニに植樹が決まり 4 本の苗木が海を渡りました。

アンジェでは、1999 年 3 月 10 日にジャン・リュルサ美術館の庭に苗木が植えられました。この植樹は、同美術館の所蔵する、核兵器や戦争を告発した芸術家リュルサのタペストリー（つづれ織り）「世界の歌」が同年 5 月まで広島や群馬で展示されるのを機に、「市民の平和教育に」と市が企画したものです。その際、現地の人たちの企画で市立音楽学校の子どもたちが「みんなのカッキー」（柿の木の歌）という苗木のことを歌った歌をフランス語に翻訳して歌ってくれました。この曲は、柿の木プロジェクトとは別に海老沼先生が独自に長崎の川平（かわびら）小学校に植樹した際に、小学校で作られた歌です。

参加したこども達や大人たちは、宮島が美術館で撮ったビデオインタビューの中で「みんなのカッキー」や「被爆柿の木二世」についての想いを語ってくれました。

ところがサン・ドニの植樹が日程の関係で中止となってしまっていました。苗木を持ち帰ろうとしたところミホさんが「なんとか植樹先を見つけるのでこのまま預からせて欲しい」と言われたので 2 本の苗木を残して海老沼先生と宮島さんは帰国しました。帰国後すぐに、ミホさんの尽力によりエピネが手をあげ植樹がきまりました。

1999 年の 3 月 24 日に、苗木は無事エピネの市立競技場の脇に植えられました。会場には柿の木プロジェクトのポスターが貼られ、市民の祭りで大々的に折り紙で折鶴を折るワークショップが行われました。この日、コソボへの空爆がありましたが、こども達は平和への祈りを込めて鶴を折りました。

オソリオ市民の家

スペイン
カナリア諸島
1999 年 3 月 13 日

スペインのカナリア諸島出身のロドリゲスさんは、インターネットで柿の木プロジェクトのホームページを見て「被爆柿の木二世」の存在を知り、柿の木プロジェクトに手紙をくれました。「わたしはロンドンに住んでいるのですが、ふるさとのスペインのカナリア諸島に苗木を植えたいのですが。」と。その後ロドリゲスさんの努力で現地の方には、植樹を支える人々がたくさん増え、ついに市民のイベントとして被爆柿の木二世の植樹が行われることになったのです。

こうして 1999 年 3 月 13 日、スペインのカナリア諸島のオソリオ市民の家（市民センターのようなところ）に柿の木が植えられました。植樹式では、こども達と大人も参加し 1 人ずつがスコップで苗木に土をかけていきました。ここでは地元のアーティストによって、２つのワークショップが行われました。ホセ・ルイス・ルザードさん（アーティスト）は、低学年のこども達と大きな紙に、そこにこども達の手形などで柿の木を描くワークショップを実施しました。低学年のこども達は手をいろいろな色で染めながら、大喜びで柿の木をみんなで描きました。ギレルモ・ロレンツオさん（アーティスト）は、高学年のこども達と一緒に「良いこと」「悪いこと」を話し合ったことに基づいたワークショップを行いました。「良いこと」を書いた紙からは、その紙を細かくちぎって入れたろうそくをつくり、「悪いこと」を書いた紙は集めて燃やしました。こども達は、一所懸命自分たちの中の「良いこと」と「悪いこと」を考え、そのことを書き留めてくれました。そして「良いこと」のろうそくを、同じ日に植樹式を迎えていた北区赤羽自然公園の日本のこども達にプレゼントしてくれました。こうした表現のきっかけに苗木が関わって、そしてこども達のこころに残ってくれたことは本当に素晴らしいことでした。

赤羽自然観察公園

日本
東京都・北区
1999 年 3 月 13 日

北区赤羽自然公園は以前、軍の工場があった場所でした。この区立の公園はそうした歴史を持つ土地を利用し、市民が参加して公園を作り上げていくというユニークな活動を経て生まれたものです。

1996 年「水の波紋 '95」（ワタリウム美術館、9 月 2 日～ 10 月 1 日）で「被爆柿の木二世」がはじめて展示、里親募集をされたのを知り、北区がこの公園にぜひということで申し込んでくれました。公園の完成が 99 年であったため、最初の植樹申し込みをしてから 3 年後の 1999 年 3 月 13 日、ようやく植樹が実現したものです。この 3 年間、現地の植樹事務局がつくられないまま進んだため、実は植樹イベント開催に際していくつかの困難が生じたのも事実です。しかし公園の企画に関わっていたランドスケープ計画の河合嗣生さんらの尽力があり、こども達や市民との接点となる植樹イベントをつくろうという気運が高まりました。その結果、それと連動して柿の木実行委員の有志が中心となって、無事植樹式が行われたのでした。

当日行われた「柿の木物語」と題されたワークショップでは、まず樹木医の小池伸男先生の柿の木や自然に関するレクチャーを参加者全員で聞いた後、同じ日にスペインのカナリア諸島で植樹が行われることから、そこの人たちに向けて、クレヨンや絵の具を使って絵手紙を描きました。この時使用された手紙は牛乳パックなどをリサイクルし、紙を作るなどの活動をしている地元の市民グループ、アミーカスの皆さんから提供されたものです。絵手紙は実際にカナリア諸島のオサリオ市民の家に送られ、その後お礼の返事とともに、カナリア諸島でのワークショップで作られたろうそくが、友好の証として日本に届けられました。

植樹後も、地域の市民グループ・トライネットワークの田口重子さんらによって、「被爆柿の木の話を聞く集い」が企画され、また、公園の定期的な行事である自然観察会において、同じくトライネットワークの豊田さんらが積極的に柿の木についての話を伝えるなど、現地に事務局を持たないながら、柿の木は地域の人々の中に確実に根付きつつあることがわかります。

システュード自然公園

フランス
ボルドー
1999 年 3 月 21 日

ワインで有名なボルドー。ここに植樹された柿の木には苗木の頃、変わった名札がついていました。1998 年にパリ国立美術学校で開かれた「どないやねん」展で展示されていた「被爆柿の木二世」の予備の苗木を、自然をテーマに活動しているアーティストのシャンタル・ラッセル・ル・ローさんが持ち帰って名札もそのまま植えたためです。

10 月にはアーティスト仲間やこども達と一緒に「KAKI TIME」という祝祭イベントを行いました。様々な歓迎パフォーマンス、演劇、ワークショップ、コンサート、T シャツも作られ一日がかりのイベントは大盛況でした。「予備」の苗木はしっかりとボルドーの大地に根付くこととなりました。その後もシャンタルさんと娘であるナディアさんは積極的に柿の木プロジェクトにとりくみ、2 本目の柿を植えることになるのです。

エピネ国立競技場

フランス
エピネ
1999 年 3 月 24 日

1998 年、長崎広島原水爆研究所の主催者であるパリ在住のミホ・シボさんが、柿の木プロジェクトに共鳴し「フランス各地に『被爆柿の木二世』を植えたい」と申込まれました。紆余曲折ありましたが、アンジェ市とエピネに植樹が決まり、1999 年の 3 月 24 日に、苗木は無事エピネの市立競技場の脇に植えられました。会場には柿の木プロジェクトのポスターが貼られ、市民の祭りで大々的に折り紙で折鶴を折るワークショップが行われました。この日コソボへの空爆がありましたが、子どもたちは平和への祈りを込めて鶴を折りました。

Le projet de Kaki 'La résurrection du temps'

La bombe atomique a été lancée à Nagasaki il y a un demi siècle.
Le projet de Kaki "La résurrection du temps" est une symbolisation artistique, présentée au monde, des sentiments et des réactions des personnes ayant été en contact avec les plants d'un arbre de Kaki irradié de Nagasaki.
Pour transmettre l'énergie vitale aux générations futures, la deuxième génération de Kaki et nous-mêmes attendons la participation active des personnes intéressées.

【Préambule du projet de Kaki】
Bien que tout ait été dévasté après l'explosion de la bombe atomique de Nagasaki en 1945, un arbre de Kaki a survécu. En 1994, le docteur de l'arbre, Monsieur Ebinuma a pu récolter les plants de la deuxième génération de Kaki irradié, il a commencé à les remettre aux enfants. En 1996, lorsque l'artiste contemporain Tatsuo Miyajima a rencontré cette deuxième génération de Kaki, il a conçu un programme pour soutenir cette activité en tant que art. Le comité exécutif du Kaki "La résurrection du temps" est une association à but non lucratif. Elle a été fondée pour effectuer les tâches suivantes ; faire ressentir aux enfants du monde entier la deuxième génération du Kaki irradié et encourager la plantation de ces arbres afin que les enfants puissent s'en occuper. Le projet de Kaki est basé sur les 3 concepts suivants ; Changement constant, rapport entre toutes les parties et répétition perpétuelle. Ce projet est un programme d'art ayant pour but d'amener chaque individu à revivre dans le temps à travers la deuxième génération de Kaki irradié.